

(もう半年もの時が、過ぎて行く。)

あの日、三月一五日の金曜日、そろそろ峠を越えようとしていた夏がそれでもまだ碧くとても晴れやかな日、ここワイヘキ島では折し、この季節の隔年行事である野外彫刻展Sculpture On The Gulfが開催されていて、僕も仕上げたばかりの彫刻カムアカムリを出展しているところであった。(カムアカムリ:マオリ語の諺、歩いて来た道程に向かい合い、後ろ向きで未だ見えない明日に向かう、と云う意。)それは人の背丈の倍ほどある二つの輪っかが、支え合うことで立っている形をもつ、この国で育った絵で作った彫刻である。

そしてその日、あのクライストチャーチで起こった惨事が、穏やかに巡りゆく季節からそんな一日を剥ぎ取って行くことになる。その報道は、時間と人々の足を凍りつかせ、思考を下向きに湾曲させ、それまで見えていたものを目の前から消し去って行った。何の道理もなく一度機に奪われた、もう再び戻らない命たちに、一体どのように向き合えばいいのか、途方に暮れるばかりであり、なに一つ考える術を、その糸口さえも見つけられないでいた。

いち人間の、そのただ自身の内に包括されていた怒りのみを自己に課し遂行する行為には、しかし何の感慨をも呼び起こされず、何処までも深く裂けた闇から聞こえてくる重い痛みの中に縛られた。あれは、いったい誰のものだったのか。

落ちる涙などに何の意味もあるはずはなく、それでも何かをしなくてはならず、目の前に立っていた彫刻をいつまでも見ていた。その先にただ色の無い紺べきの空をいつまでも見ていた。漆黒の淵に突き落とされただろう、そう察しても余りあるほど遠い彼方にいる、遺族の人達を想った。友達や知り合いを想った。かけられる言葉などは見つけれないでいたが、その時自分が見ている彫刻を、彼らもまた見ていることを想っていた。それで何かを共有できるような気がした。クライストチャーチに送ろう、そう思い始めていた。

しかし、大きい物でもあり、このイベント自体が興行であり、そのシステムを無視は出来ない。無論、関係者から反対を受けるのは分かっていたし、そんな事をすればひどい重荷を背負うことはどうみても必然的だった。だが同時に、人の命の重さを計れる秤など有りはしないことを思えば計れる重さがある荷物なら背負えないことはないかも知れない、そう思いたかった。

その後数日間、会場に訪れる人々とそんな話をしてみた。相手にはされないだろうと思っていてもいたが、ほんとうに多くの人が耳を傾けてくれて、中には是非協力するからその時は声をかけてくれ、とすら言ってくれる人の数がほんとうに少なくはない。それで、決心をつけられた。もしも、これを実現する事が可能であれば、それは僕の個人的なひとつの意志からだけなどではなく、おそらく多くの人達の沢山の想いを込めた行為となるかも知れない、と。そう云う所以である。

人の生には時として、この世を治める得る政治力や経済力では容易には近付けず何をも与えられないような事が往往にしてある。そんな時には、常々考えている事であるが、いわゆる芸術と云う行為が、せめてそこに寄り添う事ぐらいは出来ないものだろうか。この広い世界、多くの言語や計り知れないほどある文化やそれを支える信仰から、人が身に纏った着物を脱げるように、ときにはそこから袖を抜き、たった一つの命とていい、だだ向き和えないものだろうか。

(そんなことは、無理なのかも知れないが、少なくともそう信じてはいたいのである。)

2019年8月

